



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

文庫20  
288

八雲抄卷之四

言語部

伊地知氏書冊



世俗言 以二洞未入孔後目可書之

由緒言

幽簡言

世俗言



さうゆく まゆを ひかへる ふき  
とひしりつ めでりや  
とこまちとくめと とくらみ流から  
ゆりまきる わまとしらうる  
せふこくに くみどりとくまきもくとあらう  
とよそく方策十ヶ月十八日程と但多の兵の付  
ぬのくら 稲とくらみすとの動ひくせ但深民よろしくれりと  
かくはく年月をかうとわり是もよろしくれり 方七  
きくらやくはく是もわくらう也 いづか 方よもよ  
きくらやくはく是もわくらう也 いづか といぢ  
まのま たりせ田附 ぬよ／＼  
おみがほきとくらうれりあ  
えと但又間のむすもがくより  
やう 動せ あらゆく され とくもまきまくまがくまくま

卷之三

後を去るを惜良うもつれと  
まはくの御えとまらへ  
見えども とかく ひくじや十尾とまとも活捕も  
あり あまみのくふきも月より  
かづく ものひ 行きめ ちよせりのねまくまなむりを  
まよ とひてり月よりなり 云はば  
まくらむとまよ さあとまよと おぼすまくまよ  
せ

まく池より潛  
とまくといひ  
あまゆ  
もくともく也云御宿  
月夜の旅館

也乃言之諭之 稽首以仰望之也

甲斐國人詞也

物乃わやめ也言葉也わむ  
えうといふようわくも  
わやめ  
方言出とうちり  
あきくまとひかく  
さくよ  
けいじくま

水を止むに至らぬ事無く  
かて、もとよりの如きをもとよりの如き

卷之三

三

今まされと  
が流を永也  
いはくもそ

計之永也

かと一説うるこ然えりとて多くあり源氏むらの事よ  
云ふやうにいふとひきあくもゆとの様や乃はきもひな  
らきこころうめといひ是もちとすり  
まよまよのもとすりもみのうや

ひよきしゆゑも  
いづも月や  
ともひ  
許容しゆゑのよハ不許  
容ともひとく補抄

容 とねり  
ひはく もつまう未言也  
うちまう きうちまも

いはく  
ひまわりの風流也

わらう物を賣る  
絶といづり御乃事也

ゆくめり 含みゆきの  
未用なり いはさづるさ そま入ゆきあり

根之子也。人氣也。

城よりばかり地名とうちより

かくへきりやあとへて傳者御多枝すを承  
徳使はへん乃思ひをもひくわざひよ御とけまわ  
あら  
菜はもあきらへてもののかんといつ

ゆきひかく 離後し女よ南のひんりよとあらへもとのれ乃教ゆけ  
てうううへいきのまぬよりよといひ  
やまとすみゆきもあはふ人を

情捕抄三ひろといひの先も大鳴同ひやひらひやうな  
ふ 在源氏れ風くわくとくわくを主源氏者本又早稲

わくとこし源氏よしのい  
とわくまうむかとい  
わくとこし源氏よしのい  
とわくまうむかとい

蒙古文

蒙古文

老くまづかくと  
かのうへ  
ひるがえり  
ゆきもと

のひの  
あらゑ うろせ  
かくはり  
うんめうとひす  
よも、標縁とうき  
月見せ  
おまへを

まことに也方非よい乃ちも  
きんとて全幸とうとう

とまあれりよりよけびのめひととくとくの肉アモ  
いき用をわかれとがるもくら生と女房ト内事とせ終  
さわりとゆきあわくも在源氏すあわ也

云經之流は日物因苦をうるせえまふえと向うシテ  
歎うやうぬとハ田若也 万葉詩のすみうらうひうれ  
りうきもとひにせり もちか 彼方 いづみ 謙也

賀とひのれを在古近

まちうち まきよせ  
まちゆくわ ひゆよせ

ひと詠うるぬうのとよありたゞへひきくと云ふやまくはなまく  
いつちもあれられとりかよと後教をひてり詠うるそぞくとひてゆ  
だまし菜女系よゆゑのひいさよひともくよくよくめれ詠うる  
てけりひともくよくねくよくよくといてり尤大ね後家極き今ま  
縁め廢表約定ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
となづむを盡す謂之誠言非上但先例非無れも上位を考食後成云在す  
モムシトモツヒキムシトモツヒキムシトモツヒキムシトモツヒキムシ

かよひきをもつて  
身清浦おとを歌ひ  
とむちもかうじうわこ  
もくへまくわゆ  
やめ  
古今は風同ひを  
あよる  
うれし人ふと  
いはくいもん  
なり

心わて身する心はひ思ひゆるてもとぬくもや  
てもとまよへせすやがりゆる万ふせそくおほゆつた  
うれなとありせすやがりゆる也あきせ夜をせ  
すりせ睡りゆくとてりせをもせ猪子也 植のあゆ  
むきのひるふゆひるし婆 滅捕抄も因り わきらる むきを  
ひきも えさうあめりくうてのを いよどり たりこくもとありう  
かけくるかうなり あひとせん人ひく  
そや ひひきり見深民 あひの風 うかまつといづくもと  
あひの足もと あひよ ちひくと  
因り

刀くみくみく、如方深きを隱こすあひて承取之而近曾方合無併すく  
事く三歳合をう度もそ思ひ難見うれゆ遠方緊半室  
又由諸山而至多那外山也其後半室の事也  
占方既不及琴の細祖波作者うそそくもとしのぐの不もあくまこぬ人う内  
従ううたはやーくかとげ象形や物迎日す人皆基後流之仍忌先師我祭  
良の基後院の奇合もとわき基後判を附大庭従教説ゆう日もす正公  
崇れむむれくもとれくのうもとれくのうもとれくのうもとれくのうも  
はれくもとれくのうもとれくのうもとれくのうもとれくのうもとれくのうも  
未曾實もとれ候形へらぬかよス御前於てある班もと基後ノ流の不  
可名也 クヘとそりよきうくとてき洞 わやめいひく  
いよううふがと因りめり

いや年少も いよくのとくせ 姉のい色 二度一也

わくく 芳や草くの匂あまくひまくの匂うと因りめり  
放捕もとけのうくふ文動よわくのあとをねまつといづ  
あひのうもと みねもとうのねまつ也 あくら あくらう  
縫紗経文登

毛うより なうらふ あくひうと

清補綴

わくもく わくもくを くわくもく セ

ひくら ひくよ わくあ 深底きよひわき底

じくひあくらく

あよびく かよひくよきいり深底よきだくくみだくくくわくく  
只々やせ 番ひる わえふ あくくひくよ  
せくも口すがを

よもじてのせ

いなす やまうりせ お死ねを あまうり

あまうる さうまうり お死ねく あく 思うり 思

あとけく とけく けく 佛也 せくまく 神まく

ゆめゆり 妙解 くほのる あきり 時をとむかく まな

きも まとせ まろよ あぬく やまきも

まうまく まうあくよ なうじやう ひとあく今

をうがく いはく あくく あくこ ひとく

あくく あくく あくく あくこ ひとく

いあくを 氣也 つもく あく おもく 貧

まく 勝 もとく あく あく あく あく あく

まく まく あく あく あく あく あく

あがめのまゝ海をゆくとおもひてはまほにせば  
月うひ乃もうのあたげさりてつる  
あうへるやういの月 けくもめの月うみよめり  
せき後移抄 ちくもめの月うみよめり  
あくまくのくすり 月うみよめり  
のくすり 月うみよめり  
やまとくすり 月うみよめり  
まみ旅乃うと 月うみよめり  
あくまくのくすり 月うみよめり  
あくまくのくすり 月うみよめり

めくらひ とよやくらひ くわくわく おとこ 源氏物語 姫とおはなをくわく  
言ひねりのふよまくわくがくわく うやひくわく うそだ  
よめくらひ きくわく くわくわくをくわく せんじゆをくわく おはな  
やくともうか とくわく とくわくもとくわく あわく  
くわく あくわく えくわくわく あくわく くわく  
くわく

えよこうそわづきを  
縁せえあらひ面白  
侵くるふくせ

僕也

もれよあづく らくらくと 煙をく  
るもくと さのまき  
つるぎ只浦よ あくこむ草木すとよ おもむくすと ひ  
もととくひきと うら源氏うつまのとくねとも おぬもう風き  
もくまくひくまくひ  
ときうちり おどきう  
おひかよ 方切しゆくよ まうな  
ひまや ひまやと いふんは別れを

九之五孚惠心勿

多也多以不為緣

ゆきの  
うきよの  
ゆきの

是れをものめりとひきとみのうよし藤よしをも

川路百首は仲良りまくらをすりきりのれうふてくわりとくま  
まみきりのまくらふとくまのちも

之公私急近  
之急近  
之急近  
之急近  
之急近

蒙古語  
蒙古文

うそちやうそ  
うそようそ  
うそうそ  
うそうそ  
うそうそ

五  
三  
一  
益指記

وَلِمَنْدَلْتَهُ  
وَلِمَنْدَلْتَهُ  
وَلِمَنْدَلْتَهُ

田全而為田也  
勿之也

酒食の如きあり  
不思議の如き無し

之也

卷之三

まつは  
食う  
まつは

御子の心也  
御子の心也  
御子の心也

帝は忠あまへ  
老武者

をめぐらしく見下す

ゆめくらべ  
見もくらべのやうにいつまでも夙々あれど暮れ狭衣ぬ  
寝よそぞもなきハ例もすくちよまくへも

由緒言

也と 繁拿也 あらひもく 金也  
まよめもく そも金の物と組又物とからんともく  
えもくひてり後輕用物を多きを知り  
あらひもく 一百萬オノ人とまもくもちのうへきの  
まよめもく そも金の物と組又物とからんともく  
あらひもく 十キヤウヘンシ陸奥のても  
但ちがはるもむ

あそびて遊ぶもの  
もくらひと  
山登の限

くまのと 余きても短  
ゑのと うしやつことを  
人と云ひて居也

かくのうを  
かうかくもんもわきとおひのうをとくとせ

君等はあらまよ而ち帝國よりよかうの氣乃く  
まちうきとまちうせりてからま

よりそくさり  
まくく文とひえ  
後半抄本あり

錦木者柏杆の様ととづ世故よし不外由後柏柄よき煙  
奥段うやうとも思ひ人のあはまうどもうりあうれどもうら

見清浦抄委  
お羽はむらの川箱をばああ河早すよりて上  
を下へゆせばいのうりうりとよろ月も

アリタヒト云ふ事アリハナリト  
アリタヒト云謬説  
アリタヒト  
アリタヒト  
アリタヒト

占ア氏ト占ムタムニ  
怪ムキテ既見清浦村

望御流  
又の外あし後成流を濱川上り  
ととなり友川の上りともいひ

おぢり ゆよひをのうへらんあタリよ本とれやとそ

そぞるおまきそぞのまくふみとぞとぞ

凡のまくらへ 神代よりまうまんとぞ神女御とが給

えひる おまきそぞのまくらわくとぞひとぞ

おとすよまきそぞとぞひとぞ入せ

あまう まをうりてゆひわいしやけのまよとづを

ひつひきとひづりそめ

あむく 神私よ物をまよとづを おぢり おのちうへや

よそそくじ あくまかのうにそよそとそのゆうよとぞひと

ぬう うきうよ本きことぞわりそとぞ

かうせあくうくおぢりのうせ

おひ えいきよとく矢よ虫を精具とく

うきうかのゆうひ うきうかのゆうひ

うきうかのゆうひ

うきうかのゆうひ

せりげじ 口ばむももあら意とろ人ののむ

のうきうき由緒見清浦抄

御まくらはまくく ひのくもせうこひ

あくらく 三きび一月物をひのくもあたへとぞひとくを

ぬすくもとく清浦抄有因縁とくをひとくを

わまううそ おまくらを兜咀とくとくせ

くわくまくとく

波ゆるおまくら 松葉遠うせ在清浦抄有因縁とくをひとくを他心

のゆくらそ おまくらをかくわくとくとくとくを今よ候がや

きのかくわく

りすとくそはな あまくらをかくわくとくとくとくを今よ

きのかくわく

卷之三

十一

後悔也說是說一人也說  
說人一人也說人也說人  
也說人也說人也說人

卷之三

之爲也。其後神明之氣之發於此者。固已無窮矣。而予之嘗與人共之。則又不以爲過也。

まゆの御くわんとどろ相也万葉より「り眞ひ紙と紀きとく  
皆月相したてのゆことくわんのまゆの御くわんとく

あまくちわまと月を  
あうとまよみのめ思と人ふ

らまくら根  
もひら  
かまひのうのまひ  
毛いせ

川石為辰星狀功皇后平  
新羅王遣國人誓言也

御の事  
おもふ云  
やうくは  
かひきのまよせ

やうのけく  
よしやうやく  
まことひきうち  
りゆくのこ  
ともぢら

老のまゝに  
このへんに  
あらへる

おまえのそばに  
おまえのそばに  
おまえのそばに  
おまえのそばに

うそをまことく  
うそをまことく  
うそをまことく

五七 云實之源之後耕於日之山  
あらまひともへり委て君

西漢書上記載有「漢武帝時，張良、韓信、樊噲、周勃等皆爲謀士，其後皆成將相。」

御殿の様く照見  
わのくあれ、此

を急務也と云ひて済民の過失に拘らず肉飼よりともくらうま  
ひまつてありよからむとすなはりといふに済民すれどくらうま  
ひ肉ありとぞあつてひまゆきとまゝまきのひよとちむとくもや  
あくまゆきとまゝまきのひよとちむとくもや

うとのぬりえ おハ田じくろは田の水まつりとひづれをもと  
かどきうよ大豆とうづぬまくさ。とのぬりえよ

卷之三

三

四

あとづらくまくら  
後れ抄

娘  
おちだりうまとくみえもひま  
うどせこまちくわくわよいす

ひるひるくまく  
毛毛のあくとまく

風をはよけ  
風をよそよふゑあくの  
あらわのゆづり

よきもの他端どう  
ぬれを付く

蒙古文

よほど宜とう心を取るが爲めにあらううの事か。  
お前はいじめの業者もあつて男のうらをうなづく  
まことにあらへそまつといふ

後難お旨ひのりのよよくまのめがくや物の主の有女を  
きく人のわざへあつてかうふるふとをうわづけよしわ

めで秋の夜のよきこねひうちゆふれとあらわすおひを  
あらわすとそれとなくおはなをうながすとさむと思ふ

りぬわう等うをもとめくにあつてもうとせても男  
きくさうりぬくともよなとのたうあつてお

うふくに風といひ  
えむせむらはまよ大風

もとより物語りや  
先ハ仲をすましテモシテモトヨタニ  
きりそくうりよとあひたててみたがり  
たのじわら  
先ハつせめゆるくのめじづくらへふちづめ也  
主はくまを入る數三表聖等非大和若壁而也

卷之三

十一

日久人未む吉野下多も源氏も又事多ニルも多基後流よ  
るよもあくとわしてまつて或焉まちうらもろのれりのうりそ  
がくよりうり合てわとまうじよを後耕流よハ居と非稻田乃面のうり  
うちと推せりぬ流耕波而逆代をさむひのさぶとトモウニ表記ひよ  
しのわとじうの表記よくのうよ

先もそのものあつまつておもとからまよ  
れどよ どうでもうそくわざとすをよせてもうも普通よハ  
不候御座候早蕨をひくゆのまわをとくふととすよ まわ  
えうけらうとあきひやとちくまつまよひのまわのうれいじ  
よアハシウのスアヨウアハシウモテナリトコトマサレア  
トトモリハサカタニアハシウモテヒラヌのスコトツクシ  
ホ深きをともかねあくとくとくといづもとくとくとく  
りゆうよ

よつてへるも先を移はよども先源氏よりくらふを蒙りと幸はぬかめ  
中ね志を余日うへて新しろすよ葬のもうと源氏うりてよど  
いづきよむまへとされようちとまく中ねうすせ必不移モナリあ  
ともよのきとまくのあもとくわぬとふそめうづくのうづよ  
とくへくうのうと里よめ總征を令とくとまくよお月  
のひと清浦月とまくうえよくとくが林うれやうくとくのうづくわ  
あまたとくめと後れ判云うくのうとくうづくのうづくわ  
象の月とくうよくわとくはうくのあよくわくわめとくあうとくとく  
まくともかくまくとくまくえとくひくとくひくとくひくとくひく  
いづきの林とくゆくめとくうづくの林とくゆくめとくうづくの林

アホウトキハシマリタマツのアホウトキハシマリタマツ  
アホウトキハシマリタマツのアホウトキハシマリタマツ  
アホウトキハシマリタマツのアホウトキハシマリタマツ

勸善言

卷之三

三

滿誓う疏は承認もむきをわざうせよ  
之が今もまことにとては

一わくめにまつたる事は、  
よき事なる。此をもつて、  
とくとあやしくて、うやまふことを、  
うちおをひきゆく。  
義とよきわざれやあひげのむきをよし  
ひそかとよしをす也を万十二

一  
きのうの梅の時も梅の時もを  
ぬくさんと見て後段とうちゆえとからうるまうけ  
つまうてじゆくとひそひそよやくと方策よめにさ  
まをもつかさうひとあくと皮をまとひりふみ  
きらうし物わざりよまきつうじゆくがひ  
くまじゆびあつまくをやめによく生きながらみ  
せ柄の峰うねよ梅のはまくまくらといふ  
がちまくおまくいとまく

中へとわざまくらへやま  
のとあらへにまた素すとくらへ  
をとくらへ序勢の源の意は  
そといづれくらへも風又教風と  
くらへ

一あきのれのむらをまわるものなどと  
よきくく魚や是も紀女と女房にいたる  
えりをよそうわらふあるからて故安  
生れゆふ者安罪はゆるうとまつてゐる  
一ひりやうをくらべるときのうりふわうひと  
ともやまとくぬようきと計画に年貢は  
きる経方及あらはの間かといつてきくがゆゑ  
わきろくのほねま月壁打遠樂わざひきらんち  
まちよ天陰雷雨下のまのじきあらんあらひ  
一歌の歌いふくらめまきてすものくらめり  
うよてひきり是を万葉歌集にす也うくらめ  
さきうせうるをせぬのうよいてくらめ  
歌下は捕ねまひき難く祝く白髮とくら  
いづり船方紫才十人六艘北挽船をひけまくら  
一わきかくもひひのこよおもへうきくらめ  
の色すてありやむとひんがはあくかくと  
あくへくもひくもひくもひくもひくも  
あくもひくもひくもひくもひくもひくも  
あくもひくもひくもひくもひくもひくも

一鷹の御みよひのけわらうとつえ  
あくも川十度まよと月極めくとひくもひくも

うのひじやもとひからひを搬すありうひやハ度失や  
とうちり桜田庵あまきまで反せゆ村主宴也深琴  
浦じうたこひうのふを引うわうどうひやひあよ  
並くそんそく地く物よりは捕おほすをわら

一  
やくよ抱この橋のりやてりよかう大木をいまよ見  
ふと清是坂天主妻を難波うね上室無難せ故えを  
左大門橋従先あせじよ御承起宴所人きよともも  
御承起より橋乃千の板多つらむとわら是故え  
なり延え附海こと乃橋よきくらむありそれよせく  
ありうきよきのきわくこよのまうちまをまにき  
絶れうきよ極まことよわくらむやてうどよ  
大木りよとわねまうす

一  
わの風もぬくさく太く乃の木下へよめ川  
くらと風とわの風もぬくふくんせんすれゆ  
や大くうそてき松よそめくまげくまくの  
きりくよめくじんはせんすれゆとあるといぢ  
いのくのくまれととのけよひくうのをさめ  
乃かくうそくうきをせしらる男うづく乃  
あの方をもくうひくめうけをやのゆとよ  
ぬ男を放ちうて乃男をうひとあると件の女  
かりあを見大むね波

一喜まれどもとのまくれを御せよとをやうる  
シあらうと是をあうわるうつて余わせを餘め  
こととのある事すべどとくあら今よりひきと役  
ニ鶴のふを取らかといてはかりに捕掛よりうち  
一うからう乃津ゆくおとくまくひ生えうきま  
げうさよひのち大体依様は右ゑすれ役組令書  
役藩ふくよ姫お別を行ひくはらのうよ乃  
かりてくらく小難志みとまゆくまくなうへをきく  
あうとあうとあうとあれくらき海せひ生ハ神とくと  
きくせびうス是流わまともひ乞て擇南丸形あま  
夙古記自考成小度を押捺天官を乃が人件役辛  
產生役新乃志をあれりうく百歎苦をとくもん  
あよ旅とあてこの村よづらじよめ明葉家村井  
はぬみと咲くまよまよ人よ勝てりうと別う日う  
み紙うりて帰よわく歸別をうひく進てくら  
ぬとくらの附うかをあよあくみぬ役平差連ふと  
いてくらうとれ井てぬみよふてとととくらまのく絃  
之ひきくらむうり是一況

一先とまくいぬつてううのしめことをよみわま  
をとめうを是を山よ松まうね浦ひくぬよまほよ  
道をとくつ附けりもくぬとむわりまみくらまくれぬ  
まくはまくの里いはきぬあよひをうくらくを

神仙と同母子が御ひて養てひまれけりもか  
ものめりそくすゑをあくやむらしくもくらよ  
わくふりとひきのうとほよきうちもくやと  
こよろほときこせうわくを東めりとよき仙  
がくひの南へとてうなみのむだりひもく  
をまつみうじわくことよひ

一  
えどくへよもじばねどくらはくまがくまもひ  
ゑ雄鷦天曾淺夷よもじあまのひとまくわを  
うのまくわえよひくらふにて七日めくあくす  
さりきうねよ神女おまくはくとくよひまく  
ひ神のまくはくとくよひがる和わくだひと  
かとく水とくわくわくのねとくかくく海くよ  
むうそわとのひくらんとひくらと神女う  
ひとくらむじとわくがくとくとくくせうの  
男かくとくわくわくとくわくわくとくわく  
とくわくとくわくわくとくわくわくとくわく  
とくわくとくわくわくとくわくわくとくわく  
ちよかくとくわくわくとくわくわくとくわく  
わくわくとくわくわくとくわくわくとくわく  
じくわくとくわくわくとくわくわくとくわく  
じくわくとくわくわくとくわくわくとくわく

一

うめえぬかわくわくとくわくとくわくとく

久遠みを 天平七年正月新とすが日暮坂上良  
ゆきじくまもとせうの理教といひそらわまき新の道學よ  
つまくまうせよま連とくとておよまくまう大綱を  
大伴旅人よりよづりまく縫よほまくひまくよほまく  
松尾太志が衣川令婦依前薬の縫を用温泉不主義  
處女ひとりとくさりて絶じうせ

一家もともとをえくらゆのねくとあくらやと  
乃はるかうり間大臣遍足の姿見とくとくのめとえ  
傍うやそれとえくとくとくとくとくとくとくとくと  
一枝の花をゆくとくとくとくとくとくとくとくと  
あらうとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
と酒のじゆと禁一枝うありあくとあくと  
二人をゆくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
い筆のもく梅乃花

一枝の花の壁へゑうねむねをうりよかくげくと  
とゑうねむねをうりよかくげくと  
とあねうねよ大娘よくまくまく縫うやゑ歎せ  
短辛よだらまとひよくまくまく縫うやゑ歎せ  
ひよくまくまくよくまくまく縫うやゑ歎せ  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

花乃うやうとくあまきと月がるべうやうあは  
うらきあは不争也の花をうらうも花を  
一えのむじもとこらうれまもとくとく葉よ夏  
にうりせうじゆのとじてかくらといつらを見  
うきうほうとくとくとくうんまうせうれくと  
ち三枝とうらうくらうくらう二枝を核の内  
葉うらなむもいりてお陰いはりもこくくつてう  
とくともうあはうくわううせ

一うちもなのふうせよゑまぬふもとくは病を  
玉とわくじくじくじくじくじくじくじくじくじ  
は花經済がふよ云不潔を間接が茎花をあと  
あらせうれきまのひそひそひそひそひそひそ  
なとく病をあむとわくじくとくわくじくとく  
キモひもひもひもひもひもひもひもひも  
ひもひわくじく

一さもるみとゆくゆく神をかくう角くくさか  
あうのうくへ坂うら日午紀云天照太神は猿を猿  
命とわくじく乃ううけふをあくとせんとわくと  
よはふ多よ豈大うかく神とうひ魂神多已上  
あくへきえの乱うの乱うふ歎神乃わきえ  
とちううきめむじく六月後もるけり荒岐夜雷

とつちひるやせこもんはまきりまふとくを  
わづうづよ八十詠詠とはとて向てのこま  
くちしきめのりんよこまようん詠きやう詠  
ちゆくも詠をばよう天鵞見聞詠詠乃集あり  
葦原中ふきいの詠みとあれれもむれくわい  
海船もあ標火とくすときの八月月塊とく  
わく山をうきゆの詠まゐのわく死くとく  
行ともあく方薬才十六玄高城を遣う陸奥ま之  
附木日放緩急異意於附まき不悦愁色於面障  
役飲饌不肯宴樂於是も前采女周流娘みたむ指  
觴衣もねみ擊之生膳而詠けう余乃まこと酒饌樂  
飲終日えじき遺在方薬不酒之萬物城もむは

## 太白楊德兄弟あり

一  
あうらめよじうんわくくいえうとも不義も  
わらめて古今も絶えれあられとも併勢クモセ  
うちかくくろくよあそらんといつて小ぢ院大臣と  
そのきぬうのうめふうりともとくらわーとよ  
りうかりせめくとくらわーあうとくらわー  
せりうらよおせくわくわくひくせめその  
うといつてあり迎年通具などもそらう乃吉時  
とくらわるかゆもがわくくとておゆくゆを

一 あまくわらひあらうやいはくよろこの破るまち  
沖よりくふうち是を充年ぬけようへゆるゆる  
をのととむあをもせんじてくらす御方みだまき  
れうつまつてあらすりうるがみくらす  
らひくわらとあおむくへくらもくわいとひか  
つよくもじひひづくとくわんわりけりと  
ひきれをあ人のゆよきくと、あらすまよれ、  
ああとくらまうせねたひくようとくわんよ  
せくらすくめりうへあらすけほのひでくわ  
うな风俗のうよゑくまよれくわらとくよとくわ  
あらすくわらとくわらとくわらとくわらとくわ  
いきよりめかりわくわくといあらうめせ

一 あまの御孫乃くのをまくれてよううふ  
くらくまかと ひうひ天年慶安二年正月三日  
尚経監み主事令均於内裏之东庭植下即綱玉帛  
棘宴弓射内道子友系別に射勒立行至御膳任  
意地う賊均の並詔旨各陳仰行作弓也右云右中  
大体官禁あお化組像大義政不協奏之也是よもと  
てくえち只御事乃くのようくまくわらとくわ  
とくわらとくわらとくわらとくわらとくわ  
やとくわらとくわらとくわらとくわらとくわ  
ちの御の日ういとくわらとくわらとくわらとくわ

かよたまくにといひるうお流よきりのめぐと  
とうれいさんまといつもゆとくらの幕とま  
えりりさんまとくらもまとやめんじくふくま  
さくわくえくわくまとたまくにといひと  
はあ乃ふきいはまくへうをかとすく松毛  
とちやふらんきむくかくくわゆとくの政宗毛  
法息ふのまんくやうもくわゆとくの政宗毛  
あうどくやうらんきむわゆうら乃不義毛  
もくまくまくまくいはまわゆうらのゆくひ  
まくまくまくまくまく毛也能身以はう様よ人毛  
僻事也俊成ひてりまほよ人毛とひひのアモル用  
体うきそくへ思波丸

一  
かみゆる池もよみてうきうき乃あくまうるの  
ゑ乃てくもくも是もうきうき乃の池もくもくの  
あくうきとくもくもくやうくもくもく一派御の帝  
あくうきとくもくもくやうくもくもく一派御の帝  
えまとくとくもくもくもくもくもくもくもく  
むわの薦乃のくもくもくもくもくもくもくもく  
えまとくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
枝あり毛もくもくもくもくもくもくもくもく  
一望御の御のむねもくもくもくもくもくもく

ひきんこきも要くうすよの御事とある也  
めいさくすくお神事とくわせ後教とくえぬ  
とくまが無風情教の神事ありものよひよかせ  
来がわる人のわよまうとくわるがゆく

一  
ひきんこきも要くうすよの御事とある也  
めいさくすくお神事とくわせ後教とくえぬ  
とくまが無風情教の神事ありものよひよかせ  
来がわる人のわよまうとくわるがゆく

一  
ひきんこきも要くうすよの御事とある也  
めいさくすくお神事とくわせ後教とくえぬ  
とくまが無風情教の神事ありものよひよかせ  
来がわる人のわよまうとくわるがゆく



卷之三

卷之三

まと極くもあらずと見えりともかんとうて又  
まちうそとまんぢりふきへるよもくわざまじく  
おほきをゑ鬼乃くちとえれとおとあられじ  
わり又日乃くらのうりとくとくと刀をひふにと  
ましりくもめもしゆみてるふをくぬまほ日中ふき  
へるよりとまよるくとくとくとくは累薨とくとく  
お車わん人をくらうてまじう事くうわん  
人を抱くくらうよせとくとく  
いづりん人とくらうてくじよくうりふくに  
あれひぬく

一 もとからわざとやうひのまえあらぬる  
うれすまへる氣を如じかくせぬせ尙河  
わざまくおも風を吹きひきよさへて  
うらうへゆくわるたゞをゆきむれわら  
りうきうちと云はれ月暉之  
一 うきよのいき人まのうきくおれよ  
うう獨れ

一ひのとくを月くせきめくよこからふやう  
あら中山ばうと一統よふとわりうるもんと  
後れとて新とのむりえ古人のうとね  
ひのとくひのとくひのとくひのとくひのとく

近頃よみやうとくをあきらめよこぢりぬ  
ちるときのふるいを費之くおもむき  
日記よじくかまう山わ  
里ちやくまにありまるとすよめやらへんりと思  
ふもあれせとうちりをふくひらきやねふくゆと  
ちをぎりとうふといはせこまくるう乃ほの風俗うり一説  
よよこがわくのうわ乃ばとひづり

一家うちのうちの内にとくらうひよ總てを  
乃の所へちひの内に石を千人<sup>レ</sup>引石やりか  
なむりを七<sup>レ</sup>もろこせそれとひよをもすよ  
はとむかみの神<sup>レ</sup>を云ひ乃の事<sup>レ</sup>を神之様  
伏<sup>レ</sup>むるより前<sup>レ</sup>もあくまく<sup>レ</sup>のとくらうひよ總てを  
細说不能劫之

一  
あがむきわよ乃りもくとくらめのそりと  
えよくせよ 何をかねてまいかるとき  
うらえの奥よわら

一むじきくらひすま乃くめふうくーそわひおなま  
と年をくらひもをわひくきくとくふひ年乃く  
めよもあくくめんようくくとわひくきてくくひ  
とあくいもくさり年をくらひとくふひ年をくへりとい

ぬ也是も荒蕪也  
ある事乃この事は少くあれ  
もう生める是は正月朔日を改多不有れ

萬物數幻うまむる事ありまつてのれをも乃ち  
ようへふえ乃くもろよそうとくせうくみゑすの内  
而或況よもや既く誠叶ひふもわれよ必不づ徳毛  
候只自あすき孝武帝崩又年正月朔日也改月以対  
主義蔡叔とすりく者とう無くたが乃くれと既て  
陽とヒ帝をもろひ終之れとぞといひ

難波の志乃山乃木少の月八日  
多の秋月乃望之月九日  
亦九月十日

もれやがいづるうれ抱朴子自月之精生も是の月盈  
而深渺大生是を大もくみくもおもく山巣の  
月もいわゆふする氣よりむへいはまも不遠  
一あらめけめくらんをすらにねまういはよがふをせん  
てゐるを是をそのとくにゆき經乃背ニよわりてふな  
まどつてとくにゆきの縁よわりも貞婦ゆりこまく  
てひきくひてとくにゆくは女れくゆみとくと武  
昌乃かよくをくふまのゆくをのもみくとくと  
まくをくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
なりよもくをくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ひとよまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
隆を更経付一様也地統も善強ね遠充

少卿年少才子也。因之而得名。乃之少卿也。  
其后有此家氣。故名之曰少卿。

あ温衣者不見と約すむわり又騰雲如漏煙密くか  
寂縁とひきとすとぬの似象りあるべ

一情のうにせとけりへきわ紀きりははまことちとて  
ひねもとすとくみくひえのよのうをつまく  
人ともとくわらそにけりとんといひありとく  
ももせうりやふかとわりふおもす思はくま  
と勝也物志とくまもよも悲強惻る均とくま  
人争とちてひとと見え一人がじ一人が死を  
無あるまき酒とのまきやくらふものとくらうを  
死をわむくとくのとくとくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一わき日うきす御角りよてる月乃わくまのとくを  
山うきよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
映しとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ふうり元月月と日年紀號一云序弊清序弊冊二序  
生日序はみえうとくとくとくとくとくとくとくとく  
経は時天地わいとくとくとくとくとくとくとくとく  
もくらとくわいとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之四

卷之三

も殊子うまんとちひたるとくもとくもとくも  
ゆかれお外き日神とくもとくもとくもとくも  
也ゆの神と月神とくもとくもとくもとくもと  
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくも

日は暮れのまゝやまくらす  
夕明とこもるかまへとも春風  
晴れ陽映川さりてしらすより見えば秋乃にわろ  
来るよしやあうそとおきみふらむ廣よきわんとせ

松の月夜の紅葉のとれやあすわ  
ぬ紅葉のとれやあすわ  
とれやあすわ  
とれやあすわ  
とれやあすわ

林く里も月あはれのやうある光と夜とらしく  
うりて是をも相のうつて來もなきよさえと夜のや  
うよしはうちせよかせん月のうつとひゆうを  
移す氣を覺え月半を川上よし桂の木の首  
よもよ人の人わち樹の姓吳名爵文西の人年  
十六歳をまきひきくふきといづら是とうづむと

あとのすりが典云月乃中よ桂わるふあくは妻炭  
縁云簡淳松地よ簡淳樹わり一名波利寶多一名阿樹  
名ニ八百里千里樹法月中よ現せり波よノルモカ  
すらせきと月乃中のうけふらをかくすらを  
一林ノ月あらかとてまつりてれどりをえ  
タモトあらかとてまつりてれどりをえ  
リを日紀月代主神海中よ八重蒼柴難とば  
くわくうわくうわくうわくうわくうわくうわく

一月あらかとてまつりてれどりをえ  
といふせんヨラナリトアモトアモトセラヒコ  
のうまえ室統魏武帝月の星稀鳥鶴南毛燒樹  
三四何枝三絆と云ひ也

一也れくまえ紫もりくる月うきのあらかとてまつり  
いととととらんゆづらはくとも秋代よ天稚翁と姓  
トトと草原中む乃邪鬼とくふくめまめあ  
もと即取毛主之女み下無娘とめどりのうりもと  
ヤミハシの内よもむきもあやもくもあらなれ  
しとけりもととわめきひめのうとまへひめ  
ううふくゆるといひ

一わくうりよかくうとめくわとくわくねゆ  
へきいもとく海よ是もかくもとくもとくのうな  
ふつみあれも風乃あらんよなれくじゆくも

トモシタカヒロトアキラム  
シテハシマリ

のをれくのを

一わいし来乃山西のそうりをのまうへとれどりとよ  
うきうへおもひのわへひことひある天地とれどりて  
涼温未うとかどの山よとすとゆきあわとね  
かよのよろくものると山よとすとくらうとね  
ひよろくのわへりあらあも日午紀乃問答  
物よかへんじらうと山よじらうとがくとてわ  
とひくゑよとくわへひよのゆよとすとや波  
羅捺ふみ一角仙人となり仙わらむひよの角わ  
ひよくせこころわへゆり空無きと渡とくと外と  
えくわらめあくわへゆり空無きと渡とくと外と  
とぞとくわらめくわとひよとすとをいす  
うあ見初度遍才十七を力よと筋人へては塗  
ぬわへひきと山よと筋人へては塗ぬと山よと  
きんをぬつとねとくわへせよと筋人へては塗  
ぬとくわとてくわへ鳥帽よと筋人へては塗  
ぬとくわとてくわへ鳥帽よと筋人へては塗  
ぬとくわとてくわへ鳥帽よと筋人へては塗

一ヨリのやを二輪う山すと夷くわらめひまを  
松くわの門出事縁もじくとまをわゆはわを  
男船かくあくひるかくと女くわらとみぬと  
うかくれどとあだむりせ船うへくわと  
むらむらむらとひまをとのがたりうか

とを御ともとせよめへとひまくもそのう  
きのうりよそらんひじわめりくみよとののくへ  
まねにけうわまくまくまくまくまくまくまくまく  
あまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
えまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
うともちうりまくまくまくまくまくまくまくまく  
御うれがんうとあひくをのうまくまくまく  
かうまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
ほひゆそそなまと二病の御めはがくまくまく  
よ入ねうれがのめりニモキのめりまくまくまく  
云はくまくまく

一  
えのぬれいじきつまくよあひりむるやく  
そりあむじやくの闇をぬれといひてくせ  
をふむまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
ありふふくまくまくまくまくまくまくまくまく  
りとおとこまくまくまくまくまくまくまくまく  
えあらしやくまくまくまくまくまくまくまくまく  
わ

卷之四

